埼玉育ちのグローバル人

インドで仕事をしてみたら
～私の常識は私だけのあたりまえだった～

埼玉県マスコット
「コバトン」

第 2 回「私なりの戦い方」

吉村　比佐子さん

私の常識が通じない

　私が一緒に働く同僚に期待したことは前職の日本の会社では共通認識であり、当たり前だったと思います。同僚と同じ目標に向かって、成し遂げようと働く中で、自分の常識が当たり前でなかったことがはっきり分かりました。

　常識が通じないならどうしましょう？
できない、知らないとは言ってくれない、問題が起こる前に相談はしてくれない、まずはこの 2 点をどうにかしたいと考えました。お願いしている仕事の目的や意義、約束を守る重要性を説明しましたが、状況は変わることはありません。また、話しかけやすい関係になれば本音を言ってくれるのではないかと思い、積極的に仕事以外のことも話しかけたり、聞いたりすることを心掛け、ランチを一緒にしましたが、私が期待する効果は表れません。おそらく彼らの揺るぎない常識が背景にあったのだと思います。

例えば、納期は「出来れば守るべき目安」程度と捉えています。そもそもインドの企業では基本的にはトップダウンであり、役職が高い人が言うことは絶対であり、最優先に実行すべきものです。つまり、仕事の期限や重要性は二の次常識のようです。インド人スタッフの経験と協力なしにはできないのに、うまく彼らを巻き込めず、思うように仕事を進めることができない日が続きました。

　そうこうするうちになかなかの大きさのハゲができてしまいました。心が折れ掛けましたが、念願であった海外勤務ですから、解決せねばなりません。いろんな方への相談を通じ、同じように苦戦されていることを知りました。対策として、責任感に訴えたり、自主性に任せたりはせず、強く命令するという方もいましたし、個人の意欲や能力差が極力出ないように仕事のフローをシステム化しているという方もいました。いろんな事例をお伺いしましたが、職場環境も異なりますし、自分に合う私なりの方法を編み出したいと思いました。

助けて攻撃

　初めてインドに旅行した時のことを思い出しました。夜行バスで移動していた時、ドライバーさんは英語を話さないので、バスが止まっても、トイレ休憩なのか、食事休憩なのか、どれくらい止まるのか分からず、バスから離れることもできずにいると、必ず説明してくれ、乗り遅れないように気にかけてくれる人が現れます。バスは人数確認せずに出発するので、心強かったです。
　列車もそうです。時間になっても来なくて途方にくれていると、代わりに駅員さんに聞いてくれる人が現れました。そういえば、その電車は 20 時間以上遅れて到着しましたよ。その時はいつ列車が到着するか分からないので、ずっと駅にいたのも懐かしい思い出です。
旅行中はいろんな方から親切にしてもらい、たくさん助けてもらいました。

そう、私がインドを好きな理由の１つは、自己主張が激しい反面、困っている人を気にかけ、親身になって助けてくれる人が多いと感じたところです。あと、多様性が当たり前なので、自分と違うことへの無関心と自分が知らないことに対する好奇心が両立していることも好きなところです。

インドでの原体験を思い出した私は、いつまでにこうしてくださいと仕事をお願いするのではなく、自分の力だけではできないから助けてもらえないかと相手のふところに飛び込むという作戦を取ってみました。助けてもらった後は周囲に人がいるところで、いかに助かったかを必ず伝え、感謝を伝えることは忘れませんでした。また、緊急性の高い仕事については、私の目の前で今やってほしいと横に座る作戦を取りました。これらの作戦が功を奏したのか、お願いしたことは責任をもってやってくれるようになりました。
他にも方法があったかもしれませんので、試行錯誤ができる環境に飛び込んでみたいなと思っています。

面接で言われた言葉

「インドで働くとは凸凹道を一輪車でジャグリングしながらトップスピードで走る姿をイメージしてください」と面接で言われました。
その時はピンと来なかったのですが、働いてみて、なんと言い得ている表現だろうと思います。
一輪車でジャグリングするだけでも難しいのに、道が凸凹なんて絶望的ですよね。トラブルが起こらない日はなかったと思います。それでも笑いながら、楽しい日々を送れたのはインドならではの常識や同僚のおかげだと思います。